

令和 3 年 6 月 11 日現在

機関番号：42647

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2020

課題番号：19K20080

研究課題名（和文）身体運動における質的研究方法の検討と構築

研究課題名（英文）Consideration and construction of qualitative research methods in physical exercise

研究代表者

武藤 伸司（Muto, Shinji）

東京女子体育短期大学・その他部局等・准教授

研究者番号：90732777

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究課題における成果は、現行における様々な質的研究方法を検討し、その吟味から、身体運動（体育やスポーツ）の主観的な体験を研究するための実践的な方法論を提示した点にある。哲学における現象学の本質直観という方法と、スポーツ運動学における借問という方法を組み合わせ、研究者の対象への観察、関与の在り方と方法を示した。具体的には、研究者による事象への積極的なコミットを重要視することで、対象から距離をとるのではなく、逆に対象へと入り込むことで、有用な研究成果を提示できるというものである。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究課題の成果における学術的な意義は、質的研究方法の利点を再提示し、科学的な研究における一般的な方法とは異なる研究方法の可能性を示した点にある。それは、科学的な研究が量的データのエビデンスを重視するために、研究対象から距離を取り、客観性を重視することに対し、それとは逆に、積極的に研究対象に関わり、研究対象との距離を縮め、研究者や対象者の主観性を重視するという点である。量的研究で顧みられることの少なかった質的な意味や価値を、哲学の方法論で積極的に研究主題として「客観的に」認められ得る可能性を示したことは、今後の質的研究のバリエーションを広げ、研究自体の可能性を拓くものと考えられる。

研究成果の概要（英文）： The result of this research project is that we examined various current qualitative research methods and presented practical methodologies for studying the subjective experiences of physical exercise (physical education and sports). By combining the method of intuition of the essence of phenomenology in philosophy and the method of borrowing in movement theory of sport, we have shown the way and method of observation and involvement of researchers. Specifically, by emphasizing the positive commitment of researchers to events, it is possible to present useful research results by entering the subject rather than keeping a distance from the subject.

研究分野：身体性哲学

キーワード：現象学 スポーツ運動学 質的研究 本質直観 借問

1. 研究開始当初の背景

報告者によって研究された身体学という学問領域において、研究対象となるのは、指導者や選手の生き生きとした体験そのものである。それは、現場において生じている体験の在り方やその変化、機微をインタビューや本人の自己反省によって取り出すことになる。つまり身体学とは、研究対象者の運動経験の価値と意味をそのまま研究の素材とし、そこから身体経験の本質を理解することを目的とする質的研究である。こうした研究の仕方は、すでに諸学問領域(スポーツ運動学、精神病理学、看護ケア、リハビリテーション等)においても用いられている。

質的研究は、生き生きとした個々人の体験に重要性と有用性を認めるものである。それは、直観的にも理論的にもそれぞれの実践領域で確認されている。例えば、社会学由来のグラウンデッド・セオリー・アプローチやエスノメソドロジー、現象学由来の解釈的現象学的分析や借問分析などがそれである。近年、こうした主観的な経験の特殊性や固有性を重視する研究が隆盛しており、人間存在の実存的な意義に関わる活動を研究する方法が模索されているという現状があった。

しかしながら、生き生きとした体験の内実を研究対象とする場合に、感性的な直観内容がいくら本人にとって明証的であっても、客観的でないということから、そもそもデータにならないという考え方もある。そのため、例えば社会学でも心理学でも、調査対象者の主観をアンケートによって点数化し、統計処理をして量的な研究に転換し、数字の頑健性に依存した客観性を確保する研究方法が一般的である。

こうした現状に対して現象学は、そうした主観的な体験の「絶対的な疑いなさ」という認識の確実性から、体験のエビデンスを認識の内部から確保するため、外部から観測のできない意識の本質を探究することができる。だが、そもそも現象学的還元は、基本的に「現象学する人」の意識の内在的な与件を研究対象とするための方法であり、すなわち一人称的な体験の記述をするものである。そのことを前提として研究を行うのであれば、研究対象者本人が現象学的な態度をとって体験記述をしなければならぬとなってしまう。そのため、研究者にとって、研究対象者の体験である記述や証言を研究素材とすることの妥当性は、いかにして保証され、明証性を主張できるのか、また、それが主張できた際に、どのような方法が有効であって、かつその方法から研究と件を収集し、活用すればよいのか、という方法論を構築する必要があったのである。

2. 研究の目的

本研究課題では、身体学研究の実践的な展開のために、その方法論の検討と構築を目的とした。すでに報告者の前科研究費研究課題において、身体学研究の原理論を呈示し、それに基づいて様々なスポーツや武道の体験記述をデータとして収集したものの、そのエビデンスの確保とデータ活用における方法的な理論構築が課題として残っていた。したがって、それらのデータを生かして探究を継続していくために、研究の方法論の確定が急がれる。具体的には、

1. 体験記述という質的な研究方法の妥当性を考察し、
2. 身体運動における研究(身体学)のモデルケースを呈示する。

というものとなる。これらによって、指導者や選手における体験記述が研究素材としてエビデンスを有することを示し、体育やスポーツの現場における身体学の実践的な研究プログラムを提案することが、本研究課題の最大の目標であった。

3. 研究の方法

本研究課題が明らかにすべきことは、研究の目的から、

1. 他者の経験の必自然的明証性の証明を明らかにし、
2. 身体学の探究プログラムを構築する

ということとなった。これら二つの課題の研究は、補助事業2年間において前者を1年目、後者を2年目のテーマとするという研究遂行の方法を採った。

1年目の研究実施計画から、以下の通りの研究方法を採った。まず4月から7月までの間に1.の課題について、現象学的な文献研究を中心に行い、体験記述という質的な研究方法を下支えする理論を確定した。この研究に関しては前科研究費研究課題の成果を引き継ぐことで、比較的早期の段階で研究を完了することができた。そして8月から9月の間にかけて、フランスのベルナル教授か、オーストリアのシュテンガー教授のもとへ渡欧し、インタビューを行う予定であったが、両氏との調整がつかず、次年度への繰り越しとなった。その間はメールでのやり取りに方法を変更し、それぞれと意見交換を行った。

その後、収集した資料を整理し、10月から論文の作成に取りかかった。それと並行して、次年度の研究のためにiPadやGoProといったアクションカメラなど、比較的使いやすい、かつ運用しやすい器具を購入し、これらを用いた運動観察の観点、物理的な視点を工夫して、10月以降継続的に、効果的な研究データを収集した。実際にこれらの機器を用いて、計画になかった新

たな研究調査として、2月にスキー初心者の技術習得のプロセスを資料として収集した。この際に行った研究方法は、本務校のスキー実習に帯同し、スキー初心者の学生がボーゲンでのパラレルターンができるようになるまでのプロセスを録画した。ここでの録画の方法は、一方で対象者にウェアラブルカメラを装着させ、対象者の主観的な目線の体験における映像を撮り、他方で、報告者が伴走しながら客観的な姿をビデオカメラで録画した。これらの両映像を対象者に並列して視聴させ、技術習得に関するインタビューを実施した。この方法は、ベルナル教授の「エメルシオロジー」の方法を援用したものである。これにより、有意義なデータを取得することに成功した。

2年目の研究実施計画から、以下の通りの研究方法を採った。まず2.の研究課題へ取りかかるためにスポーツ運動学の借問分析とエメルシオロジーを方法論として考察した。さらに並行してそれらを現場において実行し、質的研究のプログラムを組んでモデル化の試行錯誤を行った。すでに1年目にスキー種目においてデータ収集が行われていたため、その反省を活かすことができた。それは、8月にカヤックのダウンリバーの実施において実行され、新たに追加した研究方法である「二次元気分尺度」を用いることである。カヤックの技術習得だけでなく、初体験のスポーツ種目に対する動機づけについても分析する方法を実施した。これにより、ある程度のプログラムの雛型が作成できた。以後、10月から11月にまとめを行い、仮プログラムや暫定的なモデルについての論文を作成した。

また、前年度に訪問できなかった両氏へインタビューは、結局コロナ禍によって渡欧を断念することとなった。

4. 研究成果

本研究課題における2019年度の成果は、研究調査によるデータ収集と、それに基づく質的研究方法を用いた論文の公開が挙げられる。前者においては、スポーツ技術獲得のプロセスを理論化するために、質的研究が有効であるか否かという観点において、小型ウェアラブルカメラを使用し、スポーツ実施時における研究対象者の主観映像とその様子を外部視点から捉えた客観映像を対比させ、両映像を同期させ、両映像を見比べながら、運動実施中の感覚や思考をインタビューした。これについては、パリ第5大学のアンドリュウ・ベルナル氏が実施しているエメルシオン研究を参考にしており、この方法の妥当性についての検証は、2020年度に本務校の紀要論文として考察を示した。

結果としては、今回はスキー技術が対象であったが、初心者と熟練者の両方に同様の実験を行い、その比較も行った。前者は当然のことながら初めての体験であり、そもそもスキー技術に対する語彙力がないせいもあり、明確に証言として技術のコツやカンの言及は不明瞭なものであった。しかし、複数日にわたる習得プログラムの中でクロスカントリーを実施した際、その後の通常のスキーにおいて、飛躍的な技術の向上とその実感を得られてという証言を得た。また、後者の熟練者においては、急勾配やコブ斜面を滑走する際のコツや、特にカンとして先の動きや滑りの戦略を思考しながら滑走しているという点について、詳細な証言を得られた。これらの結果については、今後論文として公開する予定である。

また、これらの一連の研究の前提的な議論について論文を作成し、公開した。本務校の紀要にアウトドアスポーツの学修成果に関する論文を共著で投稿し掲載された。内容は、本学の野外教育研究を専門とする教員とともに、登山とカヤックの技術習得における質的研究方法による分析が、その内容である。この論文において用いた質的研究方法は、グラウンテッド・セオリーであり、その方法の有効性も同様に検証する目的も含めた。

本研究課題における2020年度の成果は、研究調査によって収集されたデータに基づいて、質的研究方法を用いた論文2本の公開が挙げられる。2本の論文のうちの一つは、ベルナル氏が実施しているエメルシオロジーの研究方法に対して、スポーツ運動学の研究方法からの対照考察を行ったものである。本来であれば前年度に実施した彼の研究不法で取得したデータを用いた論文作成を目指すべきであったが、その前段として研究の方法論に対する批判的な考察が必要となり、そちらを優先した。もう一つの論文は、体操競技研究者2名との共著であるが、質的研究方法の一つである現象学の本質直観の方法を用いた、体操競技女子ゆかの演技に対する本質規則性の考察である。本質直観という方法を用いた研究は、医療現場等で用いられることが多く、もちろんスポーツ運動学でも様々な論文で用いられているが、今回改めて、本研究のために自らがそれを用いて論文を作成した。いずれも本研究課題の目的の達成を示すものと言える。様々な質的研究の方法を実際に試行し、その成果を反省的検討にもたらし、それによる研究論文の作成までのマニュアル的なプロセスを構築できたことが収穫であった。

本課題の研究期間を通じて得られた成果自体は、前年度を含めて3本の論文として示された。しかしながら、コロナ禍の影響から海外渡航による現地調査と現地研究者との交流が断念され、その部分の研究計画が遂行されなかったことは残念であった。ただ、海外の研究者との交流は、Web会議システムの利用によって一部達成された。とは言え、質的研究の本質であると考えられる「研究者自身の現場へのコミット」が遂行しづらくなったことは、コロナ禍の大きな問題として残ったと言える。今後、この点を含めて、さらに質的研究の方法を検討し、新たな構築を目指

すこととなる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 5件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 5件）

1. 著者名 武藤伸司	4. 巻 19
2. 論文標題 スポーツ運動学と現象学の関係を改めて問う	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 伝承	6. 最初と最後の頁 67- 91
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 武藤伸司	4. 巻 55
2. 論文標題 乳幼児期における健康の涵養：現象学的な考察から	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 東京女子体育大学・東京女子体育短期大学 紀要	6. 最初と最後の頁 37- 48
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 永井将史 武藤伸司	4. 巻 55
2. 論文標題 アウトドラスポーツに関する授業プログラムにおける学修成果と学修過程の検討	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 東京女子体育大学・東京女子体育短期大学 紀要	6. 最初と最後の頁 13- 27
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 武藤伸司	4. 巻 56
2. 論文標題 スポーツ運動学とエメルシオロジーにおける方法論の比較考察	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 東京女子体育大学・東京女子体育短期大学 紀要	6. 最初と最後の頁 11 20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 山田まゆみ 井上麻智子 武藤伸司	4. 巻 56
2. 論文標題 体操競技女子ゆかの演技における本質とは何か：採点規則の歴史的な変遷と映像資料からの本質直観	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 東京女子体育大学・東京女子体育短期大学 紀要	6. 最初と最後の頁 21- 34
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件(うち招待講演 0件/うち国際学会 0件)

1. 発表者名 武藤伸司
2. 発表標題 時間と発生を問う 時間意識と受動的綜合の相関性について
3. 学会等名 運動伝承研究会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------